

## ベトナムは漢字を廃止したのか？

岩月純一（東京大学大学院総合文化研究科）

ベトナムは、漢字と漢文を使用してきた歴史をもつが、19世紀後半にフランスの植民地となって以降、クオックグーと呼ばれるローマ字表記法の普及が進み、1945年にフランスがインドシナにおける直接の統治能力を喪失すると、フランス語に代わる公用文としての地位を確立した。

ベトナム語のローマ字化は、同時代の漢字文化圏諸国からも相応の注目を浴び、日本の「国語国字問題」の議論の中でもしばしば言及されてきた。ローマ字化論者は、トルコと並ぶ成功例としてベトナムを引き合いに出す一方、漢字擁護論者は、漢字廃止によってベトナム人が伝統文化から切り離され、根なし草の状況に置かれたため、長きにわたる戦争に代表される苦しみを味わうことになったと主張した。

しかし、「ベトナム語のローマ字化」は、「日本語のローマ字化」ないし「日本で考えられているような『漢字廃止』」と単純に並べて考えられるものではない。

クオックグーの普及は、フランス植民地政庁による「公用文」としての採用、学校教育での科目の設定、活字メディアの拡大という三つのルートを通じて進んでいったが、植民地政庁は、クオックグーをフランス語に次ぐ「第二公用文」に認定し、在来の科挙教育に代えて設定した「仏越学校」のカリキュラムの中でクオックグーを正課科目（ならびに低学年における媒介言語）にするところまでは政策的に関与したものの、フランス語に並び、またはそれを超える役割をクオックグーに担わせることには懐疑的、ないし警戒的な態度を崩さなかった。クオックグー普及を決定づけた要因としては、むしろベトナム人知識人層がクオックグーによる「国民」の新しい結びつきの可能性を段階的に意識し、受け入れていったことが大きい。

さらに言えば、クオックグーの普及は漢字知識の「完全な」廃絶と必ずしも同義ではない。科挙廃止（1917～1919年）およびクオックグー・メディアの伸張（1920年代）以降も、農村部を中心に在来の私塾における漢字教育は植民地期を通じて続いていた。「仏越学校」においても初等ないし中等教育に「漢文」科が設置されており、ベトナム民主共和国で第一次インドシナ戦争の開始以後（1940年代末）、ベトナム共和国ではその消滅（1975年）にいたってようやく廃止された。教育カリキュラムからの排除で一歩先じたベトナム民主共和国では、1972年にハノイ総合大学に漢字・漢文文献学（「ハノム（漢喃）学」）の専門家養成のための専攻課程が設置された。つまり、ベトナム全土で「完全に」漢字教育がなくなったことは、現在までないのである。

むしろ、現存の漢字教育は国民全体をカバーする公教育の外にある。「識字」の定義はクオックグーの読解能力のみに限定されており、漢字を読解する能力は少数の専門家

を除いてほとんどないといってよい。しかし一方で、漢字がもつ象徴的な価値へのこだわりは消えたわけではない。またドイモイ（開放路線）が本格化した 1990 年代以降、思想・文化面で「伝統文化復興」の機運が高まるにつれて、漢字ないし「漢字的なもの」が関心を集めるようになっており、中等・高等教育での漢字教育復活を期待する知識人も少なくない。

しかし、こうした近年の現象を単なる「(日本で考えられるような) 漢字復活」と見ることに問題がある。漢字知識が「衰退」し、クォックグーが唯一のリテラシーとなったあとも、クォックグーをあたかも「漢字」のようにデフォルメした書体、書法が対聯や扁額に用いられるなど、漢字への象徴的価値づけは、漢字そのものを通さずとも伏流し続けた。ベトナム語は(たまたま) 中国語と似た音節構造を持っており、ローマ字正書法においても意味の切れ目にかかわりなく、音節の切れ目ごとにスペースを置く。したがって漢字と同様に一音節を一「字」と見なす習慣はローマ字化によっても断絶することがなく、ローマ字を漢字と同様のイメージでとらえることを可能にしたのである。言い換えれば、ベトナム人は、われわれが「漢字」を読むようにしてローマ字を読んでいる、ともいえるのである。

このようなベトナムの現状は、漢字を用いることが「漢字文化」維持の絶対条件だと無前提に考えているわれわれに、以下の二つの反証をつきつける。

第一には、書字上、特に活字メディアのうえで「漢字」が見えているかどうかを基準にして「漢字廃止／復活」の度合いを測ることの問題性である。とりわけ日本語のような漢字とかなを交ぜ書きする習慣に慣れている場合、漢字の出現率は音標文字のそれと反比例し、それがひいては対応する「文化」の消長のバロメーターになっていると考えがちである。しかし、ベトナムにおけるクォックグーの発達は、少なくとも漢字知識の衰退より先行して進んだのであり、また「漢字文化」理解の消長と対応しているかどうかは、「漢字文化」とは何であるかを明確にしない限り判断できない。現在のベトナム人知識人の中には、漢字そのものが読めなくなったことを「損失」と考える見解は確かにあるが、ローマ字化そのものを否定する知識人は極めて限られている。ローマ字化の否定は、それを思考の道具としてすでに肉体化している自らの文化アイデンティティを否定することと等価だからである(あたかも漢字の否定を大きな価値はく奪と受け止める人々と同様の心の動きである)。漢字が読めなくても、ローマ字によって自らの民族文化の核心はじゅうぶん継承されている、というのが、少なくとも彼らの公式の理解である。

今ひとつ考えなければならないのは、彼らが「漢字」を読むようにしてローマ字を読んでいるということのもつ意味である。このことは、「漢字廃止」によっても、文字に対する接し方、ふるまい方という「文化」を変えることはできないのではないかと、という疑問を呼び起こす。むしろこのような、表層ではとらえきれない連続性こそが、彼らもわれわれも逃れられない「漢字の磁場」の存在を示唆するのではないかと。